新宗連スローガン
信教の自由を守ろう
信仰心を広めよう
宗教協力を進めよう
世界の平和に貢献しよう

新宗教新聞

2021年（令和3年）
1月1日
第1127号

発行所
新日本宗教団体連合会
（略称 新宗連）
〒151-0053
東京都渋谷区代々木5丁目57番10号
電話（03）3468－5551（代表）
（03）3468－5588（編集）
大阪事務所 〒550-0006
大阪市西区江之子島1丁目8番21号111
電話（06）6443－7178

結成70周年 記念事業の完遂に邁進

記念すべき結成式の会合（1951年10月17日、PL教団東京公館）

「信仰の力と光」未来につなぐ

年頭所感

新日本宗教団体連合会　理事長　岡田光央

謹んで新年のごあいさつを申し上げます。

昨年来、世界人類は新型コロナウイルス（COVID－19）感染症という未曾有の災難に遭遇しております。はじめにこの感染症により亡くなられた方々に哀悼の誠を捧げます。また闘病、後遺症に苦しんでいる方々にお見舞い申し上げるとともに、医療従事者はじめ様々な困難と対峙されておられる方々に深く感謝を申し上げます。

思うに私たちは昨年4月の「緊急事態宣言」を受けて、不要不急の外出を控えることになりました。

多忙であっても日常の風景は変わりません。しかし新型コロナウイルスは音もなく、姿も見せずに忍び寄ってきました。この未曾有の事態に遭遇して、私は自然界の警告を思わずにおられませんでした。

これまで過密都市において、こまねずみのように走り回っていたわれわれはコロナウイルスによって足をすくわれました。そして不図、気が付いてみると火の車（怒りの炎）に乗っていた自分を認識したのでした。

釈尊の預言された心の燃え盛る「火宅の世」は閉塞感漂う今の時代を指し示しているのであると。

コロナ禍―重点課題に宗教者、宗教団体の役割探求を掲げ対応

さて、新宗連は昨年10月の新宗連理事会で承認した「令和3年度事業大綱」の活動方針で、「未知の感染症に遭遇している今だからこそ、宗教の役割が求められており、宗教者としてこの現状にどう立ち向かうかが重要になっている」と謳い、重点課題の一つに「新型コロナウイルスの影響により求められる新しい生活様式と宗教者、宗教教団の役割を探求する」ことを掲げました。

昨年4月から12月にかけて、加盟教団の感染予防対策などコロナ禍の影響を伺うアンケートや、医療現場の安定した運営体制の維持と後方支援のために日本赤十字社へ国際救援金を寄託、さらにこの感染症に最前線で対峙する医師と看護師を講師に感染防止対策を学ぶ「第32回教団人セミナー」などを開催いたしました。

本年、新宗連は結成70年という佳節を迎えます。

混沌の社会に希望の光を灯す

新宗連は1951（昭和26）年、24教団が参加し結成されました。

設立時の『新宗連要覧』には先の大戦への反省と世界平和実現への決意、弾圧を受けた歴史から「信教の自由」の堅持が掲げられ、この理念は諸先達により変わることなく連綿と継承され、今日まで歩みを重ねてまいりました。

70周年記念事業大綱のテーマ、その目的に込められた熱い思い

昨年10月の理事会で「結成70周年記念事業大綱」を決定し、記念事業のテーマを「今、そして未来につなぐ信仰の力と光」、目的として「信仰の力と光を世に顕し、次世代、未来へとつないでいく」「新宗連スローガンの意義を自覚、実践する」を掲げました。

その趣旨は、新宗連が周年を迎える毎にそれまでの生活や価値観を揺るがす大きな出来事に遭遇し、「新日本」という名称に込められた「日々新たな心」で歩みを進めてきたこと。そして現在、コロナ禍により、人と人との関係が希薄化し、苦難の只中にある社会においても尚、新宗連活動と各加盟教団の布教活動の中で醸成してきた「信仰の力と光」を確認し合い、次世代、未来へとつないでいくことが、今を生きる私たちの使命であると提起しております。

それは私たち一人ひとりの日々の祈りと行動こそが社会に光明をもたらし、危機を好機に変え、未来に希望の光を見い出す大きな力となる―との熱い思いが込められています。

わけても、新宗連は4つの柱「信教の自由を守ろう」「信仰心を広めよう」「宗教協力を進めよう」「世界の平和に貢献しよう」を具体的な形に表現し内外に発信することで、歴史を築いてまいりました。今こそ、新宗連活動に参画する一人ひとりがスローガンを実践すると共に、これを忘れることなくつなぎ、伝え、「信仰の力と光」を世に顕し、共感を広げていくことも謳っています。

今後、結成70周年の諸事業を進めてまいりますが、この度の記念事業のテーマと目的は、まさに私たちが宗教宗派、信条を超え、愛和し、時代に応えるべき大きな旗印となりましょう。

私たちは新宗連の多くの同志と「共にある」ことを感じながら、試練のコロナウイルスを克服して、結成70周年記念事業の完遂に邁進してまいります。

酒々抄

この世に生まれ為すべき役割

50年経て悩み続けた質問への答え

新年を迎えて宗教家としての自覚を持つべしと考えたとき、浮かぶ思い出があります。

私が中学1年生で幼なじみの友人宅へ遊びに行く途中の出来事でした。2人で話ながら歩いてると、不思議な風体の男性が現れました。

小柄で濃い眉と長い髭が迫力で、茶色毛皮ベストを着て腰に死んだウサギを何匹も吊り下げてるその男性は、ジロリと私を睨みつけ、「お前は誰だ？」と言いました。

とっさに「俺は加納だ」と答えると、「加納だぁ？お前は加納さんの子か？」

なんかへんなオヤジだと思っていると、再び質問が…「お前はなぜ学校に行ってるんだ？」。12歳の私は苦し紛れに「そんなの義務教育だから行くのに決まってるからだよ」と答えると、「なにっ！中学生にもなって、そんな答えしかも言えないのか。お前もっと勉強しろ。何のために学校に行くのか、よーく考えろっ！」と言ってオヤジは去って行きました。

呆気に取られた私は友達に「○○ちゃん、あれ誰だよ？」と尋ねると、「アイヌさんだ。ずっと上の山の方に独りで住んでキツネやウサギを捕って暮らしてるんだ」の答えが…。そのあと友人と遊んでも楽しめず、私は早めに帰宅しました。

あれから50年を経ても、尋ねられた質問に悩んでいました。ところが或る日、ふと読んだ『ゴールデン・カムイ』という漫画単行本のカバーの中に印象的な言葉を見たのです。「カント　オロワ　ヤクノ　アランケプ　シネプカ　イサム」（天から役目なしに降ろされた物はひとつもない）

私の家は、曾祖父・加納包球の代から病気平癒祈願を生業としております。アイヌさんは、私がこの世に生まれて為すべき役目を探すのが勉強だ。その自覚があるかと尋ねたのでしょう。

新年を迎え、すべての人が持って生まれた役目を考えたとき困難を克服する道が拓けるのでは…と思うのです。

（加納理孝・加納大霊教院院長）

コロナ禍に「疫病払」符を授く

千葉県市川市　正中山遠壽院

荒行堂の「疫病払」符（写真／藤田庄市・フォトジャーナリスト）

千葉県市川市の日蓮宗・正中山遠壽院（戸田日晨住職）は、宗祖日蓮聖人の直授伝来の祈祷相伝書を格護し、祈祷修法と行法を約400年にわたり相伝する根本道場として知られている。

新型コロナウイルスの猛威が連日報道されていた昨年7月、修法伝師である戸田日晨住職は「人々に不安が広がっている。まずは地元の方々に安心を届けたい」と、祈祷相伝の修法伝書に則った「疫病払」符を揮毫し、境内の堂宇に掲げた。

これを見た参詣者らから「心が安らぐ」と喜ばれたため、9月から、「疫病払」符を家庭の「御守御札」として、A5判の紙幅にした「疫病払」符を縁ある人々に授与している。戸田住職は「心が休まらない時、伝統的に祈祷や瞑想が行われてきたのではないか。『疫病払』符から、コロナ禍を受け入れ、日々の暮らしや生き方を見つめ直すきっかけにもしていただきたい」と語る。

遠壽院は昨年11月1日から今年2月10日まで寒100日間にわたる大荒行を今回も開堂している。万全の感染防止対策が施された中、12人が入行し読経水行三昧の酷烈な行に励んでいる。

「疫病流行下の今日だからこそ、伝統を絶やさずに開堂した。我々には、現代における『法華持経者』としての姿勢が問われている。今年度の加行は、社会と人々の精神的安寧のための『祈りの献身行』ともなる」と戸田住職。コロナ禍を冷静に受け止め、いかに対応するか、宗教者としての覚悟を示す言葉ではないか。

辛丑の年（かのとうし）

―2021（令和3年）―

子牛が寄り沿う母牛像（北野天満宮）

2021（令和3）年の干支は「辛丑（かのとうし）」。生命のサイクルを示す干支では、「辛」は十干の8番目にあたり、季節に例えると秋の終わりで、植物は枯れ、その種は大地に還り、冬を超えなければならない。

「辛」の読みは「つらい・からい」で、まさに厳しい時期にあたる。

「丑」は十二支の2番目にあたる。丑の文字は手の指を曲げた形を表し、植物の芽が種子の中で伸び切っていない状態を示す。芽は固い殻を破っていくのだが、「丑」には、新たな生命の息吹を宿している状況にあることを表す。

では「辛丑」をどうとらえるのか―。生命が衰退していくものの、その辛さや苦しみが大きいほど、生命の初動は大きく膨らみ希望も芽生える。また牛のように先を急がず着実に歩を進めることで、成功につながるともいわれる。

学問の神様、菅原道真公を祀る全国の天満宮・天神社の総本社、北野天満宮（京都市上京区）。その境内には、神使である臥牛（がぎゅう）が各所に鎮座している。参拝者は牛を撫（な）で、諸病平癒や学業成就を願う。コロナ禍の辛く厳しい時代だからこそ、希望を求めて多く人々が訪れる。

≪今号の紙面から≫
〈2・3面〉「新型コロナ禍―宗教活動での対策と対応」＝第32回教団人セミナーの講演要旨、宗教界のコロナ禍への対応。
〈4面〉新宗連元副理事長・パーフェクト リバティー教団第三代教祖、御木貴日止師が逝去、告別式を執行。
〈6面〉新宗連結成70周年、新宗連青年会結成60周年―原点とあゆみをたどる。

（次号発行は2月下旬の予定です）

解脱会伝記編纂委員会編
新版 解脱金剛伝 全3巻
A5判 上製函装 定価3000円（税込み）
世相善導、人心救済への道筋を説かれた解脱会会祖・解脱金剛（岡野聖憲）の生涯を全1549頁、3巻に収めた。会祖亡き後、その人格に触れて自らの内に深い帰依心を培い、世のため人のために生きるための学びの土台となる書。第1巻＝生誕から事業の失敗、大成を経て宗教の世界に目覚めていく前半生を描く。第2巻＝昭和4年に立教して以来、人心救済の道一筋に生き、教えの土台を完成するまでの事績を辿る。第3巻＝戦時下の厳しい時代の中で縦横無尽に教えを説き、救済活動を展開し、遷化されるまでの歩みを記す。
解脱会
〒160-0007 東京都新宿区荒木町4番地
TEL 03-3353-2191(代表) Fax 03-3353-3055

清文社
宗教法人の税務調査対応ハンドブック〔宗教法人税制と法制の解説を含めて〕
石村耕治 編
A5判3780円
平成25年からの新・税務調査手続にも対応！
宗教法人と税務調査についての基礎知識を中心に整理し、コンパクトに解説した、実務家・宗教関係者必携の一冊。
公益財団法人 日本宗教連盟推薦！
〒101-0047 千代田区内神田1-6-6
☎03(6273)7946 FAX03(3518)0299
http://www.skattsei.co.jp〈価格税込〉

芸術生活社【芸生文庫】
高齢期を快く生きるための"人生の道しるべ"
御木徳近著
老春誦歌（ろうしゅんおうか） 長生きの秘訣
パーフェクト リバティー教団第二代教祖が、宗教家としての悟りと長い人生経験、多くの人との出会いから、高齢期を心豊かに暮らすための新しい生き方を提唱する。■定価700円（税込）
〒150-0047東京都渋谷区神山町16-1
電話03-3469-1153 FAX03-3465-6867

南雲堂
美容と健康寿命の秘策！
認知症予防★お口の体操『みんな笑顔、みんな元気！』DVD
監修・作詞：太田哲二　作曲：森重恭典／歌・実演：恵中瞳
定価（本体2000円＋税）
（体操解説・歌詞収録のブックレット付）
●収録内容（歌と体操の実演）
▣アッカンベー体操／舌の動きや首を回して、筋肉を活性化させて、リンパの流れを良くする。▣パタカラ体操／魔法の言葉『パ・タ・カ・ラ』を使って口を大きく動かして脳に刺激を与え、認知症予防！▣ラップ・ラップ体操／早口言葉や落語の寿限無をラップのメロディにのせて歌うことで手・眼・口・全身の運動機能を向上させる。
〒162-0801 東京都新宿区山吹町361
☎03-3268-2311 FAX 03-3260-5425
http://www.nanun-do.co.jp/

佼成出版社
▼違いを知り、認めることで、相互理解・協力が可能となる
宗教に明日はあるか？
（宗教間対話座談会）
中央学術研究所 編
各宗教の基礎知識から現代的課題まで―6人の研究者による熱い討論の記録
●A5判 ●本体2000円＋税
現代語訳 はじめて読む法華経28品
深遠な教え、華麗な物語世界へ
立松和平 著　作家・立松和平による記念碑的労作。●本体2200円＋税
〒166-8535 東京都杉並区和田2-7-1
☎03(5385)2323 FAX03(5385)2334
https://www.kosei-shuppan.co.jp/

白馬社
合掌ができない子どもたち
浄土真宗本願寺派福賢寺住職 三上章道
『本願寺新報』の編集長を二十年に亘って務めてきた著者が、合掌ができない子どもたちとの出会いを契機に、戦後の日本社会が戦慄すべき「薄縁社会」となったプロセスを追い、その原因が宗教心の喪失にあることを解き明かす。そして新たに現出した「原発問題」にも、同根の原因があることを洞察していく。日本人の心の問題にすると迫り、根本的解決への提言をまとめた必読書。
四六判 定価1260円
〒612-8469 京都市伏見区中島河原田町28-106
TEL 075(611)7855 FAX 075(603)6752
http://www.hakubasha.co.jp 価格税込

ハーベスト社
東日本大震災後の宗教とコミュニティ
星野英紀・弓山達也編　本体価格7200円＋税
東日本大震災後の福島県いわき市と相双地域のコミュニティの再建における宗教の役割（避難場所としての宗教施設、宗教教団や宗教者の動向など）を解明する。
療術から宗教へ
世界救世教の教団組織論的研究
隈元正樹著　本体価格3000円＋税

緊急出版 カトリック大阪教区神父 西山俊彦
平和憲法が平和への道、改憲は戦争への道
―わたしたちが核戦争の加害者とならないために―
世が平和ボケにあろうとも、「時すでに遅し」と後悔しないために、平和憲法の真価を見直す素養まで捨てるわけにはいかない。
●1400円＋税　四六判並製
248頁 ISBN 978-4-286-19691-6
文芸社
〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1
☎03-5369-2299 FAX.03-5369-3066
https://www.bungeisha.co.jp
書籍のご注文はお近くの書店またはブックサービス☎0120-29-9625、ネット書店まで

新型コロナ禍　宗教活動での対策と対応

新宗連は昨年来、新型コロナウイルス感染症の予防対策と啓発、医療支援などを継続している。その一環として新宗連企画委員会（田澤清喜委員長）主催により昨年11月30日と12月16日、「第32回教団人セミナー」をオンラインで開催し、感染症の医療関係者を講師に防止対策について学びを深めた。その講演要旨を掲載すると共に、宗教界における新型コロナ禍への対応の一端を紹介する。

新宗連　第32回教団人セミナー

2回にわたり講義と質疑を重ねる

PartⅠ　感染防止対策の事例を学ぶ

講師　二階堂　孝氏
―佼成病院　副院長

PartⅠは11月30日午後1時半に開会。岡田光央理事長が「共に学び、闊達な意見交換が行われることを期待します」とあいさつ。企画委員会の田澤清喜委員長はセミナーの趣旨を説明し、「先が見えない状況ですが、多くの人々の幸せのために祈り、寄り添うことが必要」と語った。

佼成病院のCOVID―19対策本部統括で副院長の二階堂孝氏が「新型コロナ禍における宗教活動―感染防止対策事例を学ぶ」をテーマに講演。冒頭、「個人の正しい感染予防策が団体行動における感染リスクの低減につながる」として、「あらためて新型コロナウイルス感染症について知りましょう。敵を知れば自ずと戦い方が見えてきます」と述べた。

「最も注意しなければいけないのは唾液。唾液に触れなければ感染をコントロールできる」と強調、「マスクはマスト」と述べた。また互いに手の届かない距離を保ち接触が15分以下であれば、濃厚接触者にならないと解説した。

続いて、流行地との往来を避けるよう伝え、宗教活動再開は、その地域の感染拡大状況に基づいて判断する必要があると述べた。「何がいけないのかではなく、どういう場面が危ないか、感染事例から学び、各自で考えてほしい」と語り、「理由が分かれば、それを回避することで危険性を低減できる」とアドバイスした。共用部分は特に注意することで、自ずと感染対策ができると解説した。

そして「安全地帯を確保してください。多くの方にとってそれは自宅。家の中にウイルスを持ち込まないようにしましょう」と呼びかけた。

最後に二階堂氏は、佼成病院の取り組みを紹介。受け入れ患者の感染確認以降、SNSや週刊誌で誹謗中傷を受けたが、全国の立正佼成会会員からの励ましに支えられたエピソードなども語った。

この後、事前に寄せられた質問を中心に、質疑応答が行われた（以下、要旨）。

―ワクチン接種が、広く行き渡るのはいつ頃か。

二階堂　病院でもほとんど情報がない。全国民に行き渡るにはかなりの時間がかかると予想される。

―行事再開にあたっての注意点を教えてほしい。

二階堂　参加者全員に行事前後の健康観察を義務付ける。少しでも不安があれば、絶対に参加してはいけない。

―読経の際の注意点。

二階堂　読経の際であってもマスクは必ずつけなければならない。どうしても外さなければならない場合は、アクリル板などを利用し、飛沫が飛ばない工夫が必要。

―フェイスガードは効果が期待できるのか。マスクの素材も多様だが、機能はどうか。

二階堂　フェイスガードは空間ができるので当てにならない。マスクは隙間なく、鼻から顎まで覆う。機能調査されていないものもあるので、不織布のものを推奨。

―壇上で説法する登壇者もマスクをすべきか。

二階堂　マスクはすべき。マイクを使用すれば声は届くはず。またはアクリル板で囲う。

―会食の際の対策は。

二階堂　手が届かない距離で、15分以内、会話はしない、弁当にする、箸やコップは個人が持参するなどで、ある程度予防できる。

―節分祭をどの様に実施したらよいか。

二階堂　多くの人が集まり、声を出すのはよくない。

―冬場の感染対策は。

二階堂　こまめに部屋の空気が何となく変わったと感じられる程度の換気をする。温度が下がると、ウイルスの生存時間が延びる。温度とともに湿度を高く保つこともポイントとなる。

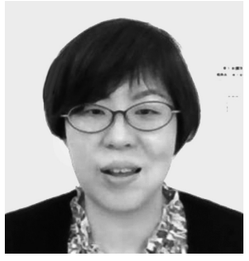
＜講義のポイント＞

- □ ヒトが動けばウイルスも動きます。
- □ 感染経路は飛沫感染と接触感染の２種類です。
- □ 最も注意しなければいけない対象物は唾液です。
- □ 感染対策は、クチ、ハナ、目をブロックすること、手についたウイルスを除染することです。
- □ マスクやアイシールドは正しいものを正しく装着してください
- □ 新型コロナウイルス感染症は発症前からヒトへの感染力があります。
- □ 感染症には必ず流行地があります。流行地の往来は止めてください。
- □ 重症化を防ぐため、現在の持病をしっかり治療してください。特にご高齢の方。
- □『3密』は３つの場面が揃うと集団感染が発生しやすいということだけです。
  個人の予防策としては、３つのそれぞれの場面を避けてください。
- □『手を伸ばしても届かない距離』、『マスク着用』、『15分以下 』であれば濃厚接触者になりません。
- □ 集団で行動する際は共用部分を見直しましょう。
- □ 具合が悪いのに無理をして行事に参加するのは止めましょう。
- □ 手指消毒は触る前と触った後の２回です。
- □『正しい食事、適度な運動、十分な睡眠と休養』で個人の免疫力の維持と向上を図りましょう。
- □ ご自身の安全地帯を確保してください。

（当日の講義資料から）

PartⅡ　集会所・家庭での感染対策

講師　髙橋　明美氏
―佼成病院　感染管理室主任



PartⅡは12月16日午後1時半に開会。岡田理事長と田澤委員長のあいさつの後、佼成病院の感染管理室主任で感染管理認定看護師の髙橋明美氏が「新型コロナ禍における宗教活動―集会所・家庭での感染対策を学ぶ」をテーマに講演した。

髙橋氏は新型コロナウイルス感染症の現状を整理し、症状、重症化リスク、発症から症状の経過、感染拡大状況、医療提供体制などを丁寧に説明した。

続いて、基本的な感染症対策を解説し、「ヒトの身体から湿った状態で出てくるもの（血液・唾液・体液など）には病原性微生物がいるはず」という考え方を説明した。そして目に見える汚れについては手洗いを、また目に見えなくても多くの人が触れる環境で物に触れた場合にはアルコール消毒を推奨した。

行動の直前直後の手指消毒の大切さとともに、手が荒れるとウイルスが入りやすくなるため、手のケアも重要と指摘した。また「手洗いは、ノロウイルスなど、すべての感染症に有効」とも述べた。

新型コロナウイルスの生存時間については、気温が20度であれば、1カ月近く生存するという。消毒方法では、界面活性剤（台所洗剤など）は身近なもので使いやすい、次亜塩素酸水は濃度や使用、保管方法を守ることが必要、次亜塩素酸ナトリウムについては消毒効果は高いが、使用方法を誤ると毒になると注意を促した。

テーブル・床などの拭き方は、奥から手前に、上から下に一方向に拭く、モップは床から持ち上げない。噴霧は効果が明らかでないため、「拭けるものは拭く」ことが基本と語った。

マスクについては、フィルター性能より、口鼻をしっかり覆うことの方が重要という。

そして「新しいことをするのではなく、いつも行っていることを丁寧にしっかりやる。それに必要なことをプラスする」と感染対策の心構えをアドバイスした。

引き続いて、事前に寄せられた質問に答えた（以下、要旨）。

―行事で使用する備品・祭具等について、使用前後を含めて、感染症対策を教えてほしい。

髙橋　素材にもよるが、アルコール含有除菌クロスで1日1回以上拭く（よく触れる場合は回数を増やす）。

―神前に献饌する品について、特に行事後、お供えを信者に配布することがある。その際の対策は。

髙橋　ラップで包んでおく。品物を取り扱う前後の手洗いを、配布する方も受け取る方も、しっかり行う。

―集会の際の注意点は。

髙橋　換気は30分に1回以上、数分間程度。寒いところは大変だが、意識することを忘れないように。

講演の最後に髙橋氏は、リスク&セーフティコミュニケーションとして、「ウイルス対策もさることながら、良好な人間関係を維持することが大切。一人にさせない、声を掛ける、顔を突き合わせることが重要」と述べ、「誰でも感染する可能性があるので、感染者を責めない」こと、そして「リーダーの力量は良い情報においてこそ発揮される。逆に悪い情報を鎮静化させるのがリーダーの役目」と語った。

第2部として、質疑応答が行われ、カバンなど外から持ち帰ったものを置くところを分ける家でのゾーニング、ちょっとした外出時は気が緩みがちになるため注意が必要なことなど、具体的な場面を想定したやりとりが行われた。

＜セーフティコミュニケーション＞

- ・群れる動物というのは「悪い情報」に気を取られがち
- ・群れは「悪い情報」に一匹が気付くとそれを一気に伝播させる
- ・一匹が気付くと全員で逃げる

＜リーダーの役割は？＞

- ・「良い情報」においてこそ発揮！！（情報を嗅ぎ分ける力のあるリーダー）
  - ①膨大な危険情報について、真偽を見分ける能力を個別に高める
  - ②悩むのなら動く（悩む時間、労力が勿体ない＝スピード感）
  - ③適切な安全情報を構築できるリーダーを見出し、そして育てる能力

騒ぎの元凶が毒蛇でないことを速やかに見出し、「良い情報」を発信できるリーダー。
かつ、皆が信頼して「悪い情報」を鎮静化させることができるリーダーが求められる。

（当日の講義資料から）

新型コロナウイルス感染症　一日も早い終息を祈念いたします（50音順）

宗教法人 阿吽阿教団本部教会
東京都港区高輪二丁目一番十三号
電話（三四七三）〇五二八番

宗教法人 加納太霊教院
院長 加納理孝
〒074―1273 北海道深川市音江町音江七五七番一号
電話 〇一六四―二五―一七八六
FAX 〇一六四―二五―一七九〇

宗教法人 救世真教
会長 新井光興
顧問 新井三知夫
群馬県高崎市箕郷町中野二九二
電話〇二七―三七一―三六三九
FAX〇二七―三七一―七一三二

思親会
会長 飯島法道
二五九―二〇二 神奈川県伊勢原市子易一四五九
電話〇四六(三)九二―三一一一(代)

宗教法人 神恩教
教主 夏目由美子
責任役員 長岡潔
〒131―0032 東京都墨田区東向島六ノ二三ノ五
TEL 〇三(三六一二)〇六九〇

世界平和教団
本庁 大阪市中央区東心斎橋一丁目一七番二八号
神族城 大元神の森
教主 松元光正

円応教
教主 深田充啓
兵庫県丹波市山南町村森一―一
電話〇七九五)七七―〇四三〇(代表)

宗教法人 神ながら教
教主 水野富久子
役員 一同
名古屋市東区徳川一丁目15番18号
電話（九三五）〇一三八

解脱会
法主 岡野英祥
理事長 岡野英夫
〒160―0007 東京都新宿区荒木町四番地
電話 〇三(三三五三)二一九一
FAX 〇三(三三五三)三〇五五

修養団捧誠会
総裁 出居徳久
会長 青木正孝

人にしんせつ 地球に感謝
宗教法人 真生会
会長 田中庸仁
総本山真生寺
住所 岐阜市彦坂一七八
電話 （〇五八）二三五―七三〇四

善隣教
教主 力久道臣
福岡県筑紫野市原田
電話〇九二)九二六―一〇一〇(代)

宗教法人 大神教
管長 西野新也
副長 西野延和
〒633―0001 奈良県桜井市三輪一一九八
電話 〇七四四―四二―六〇五七

宗教法人 現證宗日蓮主義佛立講
講主 上村日正
〒513―0809 三重県鈴鹿市西条二丁目三―六
電話 〇五九（三八二）〇四四一
FAX 〇五九（三八二）〇四四一

宗教法人 擁営界教団
法主 林玄光
大阪府交野市郡津三丁目四十七番十三号
電話 （〇七二）八九一―一一五八

松緑神道大和山
教主 田澤清喜
代表総務 鈴木武幸
青森県東津軽郡平内町外童子字滝ノ沢一二ノ一三

宗教真光
SUKYO MAHIKARI
〒506-0055 岐阜県高山市上岡本町 2-596-1
TEL 0577(34)7008

宗教法人 祖神道教団
祖神 吉岡優
天宮神宮 西宮市山口町船坂一三一九
TEL 〇七八(九〇三)二〇〇二

新しい生活様式と信仰

新宗連　新型コロナ対策の経過

新宗連は2月に総支部・協議会、青年会連盟、加盟教団で予定している行事や会議について、延期が可能な行事は実施を控え、また実施する場合は十分な感染防止に努めることを文書で要請した。

同要請は3月、5月、7月に当時の感染状況を踏まえた内容に改め、重ねて趣旨徹底を図った。3月の要請では、加盟教団の朝夕の「祈り」等で新型コロナ感染症の早期終息と罹患者の一日も早い回復を祈念することを提案した。

4月には加盟教団にオンライン化の可能性、また新型コロナ禍による諸問題、感染予防を伺うアンケートを実施し、状況の把握に努めた。

7月17日、医療現場の安定した運営体制の維持と後方支援のため日本赤十字社へ国際救援金から200万円の寄付を行った。

10月8日の理事会で承認した「令和3年度事業大綱」の活動方針で「未知の感染症に遭遇している今だからこそ、宗教の役割が求められている」として、宗教者として現状にどう立ち向かうかが重要になっていると提起し、重点課題の一つに「新型コロナウイルスの影響により求められる新しい生活様式と宗教者、宗教教団の役割を探求する」ことを掲げた。

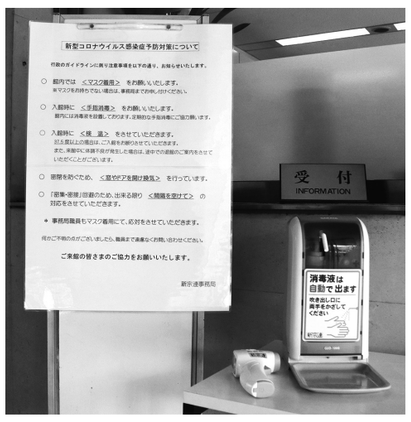
また、岡田光央理事長は「新型コロナウイルス（COVID―19）感染症に対するメッセージ」を5月11日、7月29日に続き、11月26日に発表した。

今回のメッセージでは、国内外での感染再拡大に警鐘を鳴らし、警戒を緩めることなく専門家や医療従事者の研究や経験に基づいた正確な情報の見聞により「不安や恐怖を安心や安全へと転回していけるように」と呼びかけた。

また、宗教者として、心の問題、霊的原因について探究する姿勢の大切さを述べ、新型コロナウイルス流行という難問を霊的に観た時、「自然界の警告と認識することもできる」と指摘した。

さらに、このような時こそ自己を省み、信仰の深化や心魂を磨くことが肝要として、生きとし生けるすべてのいのちを尊び、慈しみの心をもって迷い苦しむ人々に正しい信仰の光を与えることが大切と訴えた。

これまで発表したメッセージの全文は新宗連ホームページ（http://www.shinshuren.or.jp）で公開。岡田理事長からのメッセージは、今後も状況に応じて発表していく予定。



新宗連会館でも対策を進めている

宗教界の新型コロナ対策―

セミナーやガイドライン発表相次ぐ

宗教界では新型コロナウイルスへのさまざまな対策が講じられ、啓発活動も展開されている。

新宗連をはじめ5団体で構成される日本宗教連盟は、11月26日に「第5回宗教法人の公益性に関するセミナー」をオンラインで開催し、「コロナ禍における宗教活動を考える―ウィズ・コロナの時代の宗教の在り方」をテーマに舘田一博氏（日本感染症学会理事長）が講演した。

舘田氏は講演の中で、新型コロナウイルスの特徴や感染防止対策について説明した上で、新型コロナウイルスによって生み出された分断、差別や偏見を抑えることに対する宗教界への期待を述べた。

また、質疑では、感染者の葬儀で家族の最後の別れが困難な状況についての質問に、舘田氏は「最後の別れに尊厳が与えられるような仕組みが必要」と理解を示し、共同での厚生労働省への提言書作成の示唆もなされた。また「過剰に恐れることなく、正しくウイルスについて知って油断することなく向き合っていくべき」と助言した。

全日本仏教会は4月7日に、新型コロナウイルスにより亡くなった方の「葬儀、法要等についてのお願い」を発表し、「感染防止に最大限の注意を払うことが寺院の社会的責任」と示した。また、5月7日には釜田隆文理事長談話「いま果たすべき役割―強く、人々に優しくあることを」を発表。「感染者やエッセンシャルワーカーの方々が偏見差別の対象とならぬよう最大限の配慮をしつつ、思いやりをもって行動に移すこと」が求められているとした。

神社本庁は2月26日にホームページ上で感染防止対策の実施を、都道府県神社庁を通して各神社に通達していることを表明。8月28日には新型コロナウイルス対策用のピクトグラム（情報や注意を示すための絵）やポスターを作成、さらには10月8日に「ガイドライン」（11月26日改訂）を発表し、すべてホームページ上で公開している。

その他、教派神道連合会では11月17日に「コロナ後の世界―儀礼文化のゆくえ」と題し、國學院大学教授の石井研士氏を講師にオンラインで公開講演会を開催しており、日本キリスト教連合会では、同会の加盟団体であるカトリック中央協議会や日本基督教団などが独自の「ガイドライン」を発表するなど、各会で対策・啓発活動が展開されている。

◀神社本庁が発表したピクトグラムのひとつ

現代社会と宗教③

祭りの変化と宗教の真価

今井　信治（立教大学兼任講師）

かつて地域の祭りは、人々が寺社仏閣ともっとも関わりを持つ年中行事のひとつであった。村民は寺社に集まって露店を楽しみ、御輿を担いだり稚児行列に加わったりして、老若男女が縁日を楽しんだ。縁日とは神仏とのご縁を結ぶだけではなく、人との縁を再確認する日でもあった。

こうした宗教との関わりが大きく様変わりした理由は、高度経済成長期の産業構造の変化に求められる。農林漁業などを営んでいた人々が都市に出て、企業と労使関係を結ぶ「国民総サラリーマン化」が起きたことは本連載第1回に詳しい（第1124号、2020年3月27日付）。

「都市に移住したなら、その地域の祭りに参加すればよい」と、話はそう単純ではない。豊作や豊漁を願う人々と移住したサラリーマンとでは祈るべき神仏が異なるし、そもそもサラリーマンは村落共同体のように周りの人々と縁を結ぶ必要性が薄い。かくしてサラリーマンは神なき「企業村」に属し、それでも信仰の寄る辺を求めた者、あるいは商工自営業主や家族従業者は宗教浮動層となり、新宗教の教勢を伸ばす役割を担ったとされている。

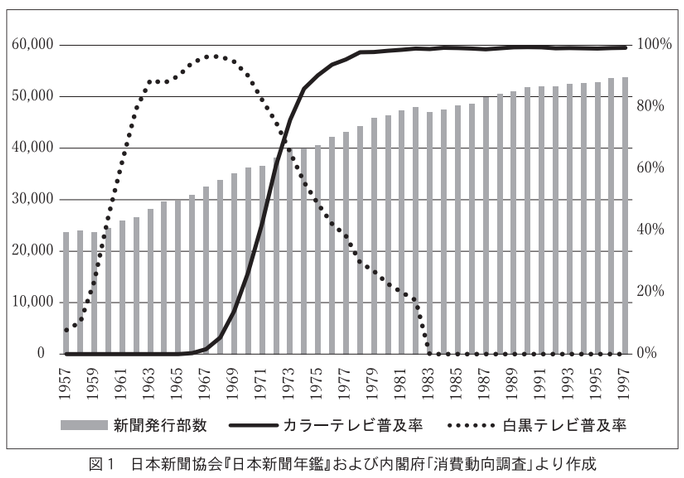


図1　日本新聞協会『日本新聞年鑑』および内閣府「消費動向調査」より作成

メディアが主導する祭りのイベント化

高度経済成長期を象徴するイベントといえば、東京五輪（1964年）と大阪万博（1970年）であろう。昨今では「二度目の東京五輪／大阪万博」との関連で述懐され、「日本中がお祭り騒ぎだった」という報道を耳目にする。

当時の資料を見るに、たしかに国を総動員するような「お祭り騒ぎ」だったのだろう。しかし、この「お祭り騒ぎ」は誰が仕掛けたのか。いわゆる国家的イベントなのだから「国家」を正解としてもよいのだが、騒ぎを喧伝したのは各種メディアである。昭和中期は新聞購読率が急激に伸びた時期であり、東京五輪がテレビの普及を後押ししたことは定説となっている（図1）。

高度経済成長期には地域の祭りが鳴りを潜め、大規模イベントを国や産業体が催してマスコミが広く喧伝するようになった。しかし、1990年初頭のバブル崩壊から始まる「失われた20年」のなかでイベントを催し続けたのは、各種イベントでノウハウを蓄積した企画・運営企業である。これら企業のおかげで、私たちは週末に出かけるイベントに事欠かない。中核都市ならば、毎週ほぼ必ず「○○祭り」が行われている。

週末ごとに「○○祭り」を渡り歩く私たちにとって、祭りはもはや特別なものではありえない。イベントでは参加する資格は必要とされず、むしろ「よそ者をいかに呼び込むか」にこそ焦点を当てている節がある。結果として「祭りの日常化」といわれる現在、祭りで繋がる縁はその場限りのものになり、祭りの都度に繋いでは切り離される一時的なものになっている。

ここ10年の「お祭り騒ぎ」を思い起こしていただきたい。サッカーやラグビーのW杯、そしてハロウィンなどが代表格に挙げられるだろうか。これらをマスコミがこぞって取り上げ、イベント企業は便乗企画を多く催し、人々は日本代表のユニフォームやお化けに仮装して集まった。時にはハイタッチをして心を通い合わせる場面が繰り広げられた。ただし、そのご縁は一夜限りで、「お祭り騒ぎ」で着込んだ衣装はその後に顧みられることもない。

宗教への潜在的需要と教団の情報環境の整備

外面を取り繕ってその場限りの縁を結ぶ生き方は、近年急速に普及したSNSなどのメディア環境に適合する。SNSならば本名も所属も現住所も明かさずに、他人にみせたい自分を自由に発信できる。複数のアカウントを使い分けられるし、関わりを止めたければミュートすればよい。

「お祭り騒ぎ」を流麗に渡り歩ける人にとって、現代は煩わしさのない楽しい時代だろう。そして、内面に深く根ざした信仰を基礎にする宗教団体は、時代に逆行するものとして苦境に立たされているように見受けられる。しかし、誰もが上手く仮装できるわけでも、表面的な関わりのみを求めているわけでもないこともまた事実である。

かつての都市化は移住先に心の安らぐ場所を持たない宗教浮動層を生み出したとされた。ならば、内面的な孤立を促している今日の情報化が宗教の潜在的需要を生み出していると仮定することも暴論とはいえないだろう。

そして現在、多くの教団は情報環境の整備に取り組んでいる。対面的な接触が制限されている今こそ、情報環境の整備が宗教的需要をすくい取るにあたって真価を発揮する転換点なのかも知れない。

新型コロナウイルス感染症　一日も早い終息を祈念いたします（50音順）

大慧會教団
〒599-8126
大阪府堺市東区大美野142―14
TEL 072(236)1601
FAX 072(237)3107
URL http://www.daiei-kai.jp

一切を生かす
大和教団
教主 保積秀胤
統理 保積志胤
総長 平松千明

宗教法人
天顕山 晃妙寺
住職 松本晃芳
役員一同
大阪府枚方市招提平野町四ノ一四
電話 〇七二―八五七―七四五六番

七曜会

妙智會教団
東京都渋谷区代々木三ノ三ノ三
電話（三三七〇）五四〇三（代表）

宗教法人
大和教
管長・教祖 保積敬子
宮城県塩竈市南町六―五
電話（〇二二）三六二―一三九二

宗教法人
大日然教

一人ひとりが
神と出会い
一人ひとりが
神を現わす
玉光神社

天光教總本部
大阪市天王寺区東上町八番十四号
電話代表大阪〇六（六七七一）三八八番

宗教法人
日月神一条
管長 嘉納良樹
吹田市内本町一丁目九の四
電話（六三八一）四一六九番

妙道会教団
会長 佐原慶治
〒543-0034
大阪市天王寺区松ケ鼻町四―三四
電話 〇六（六七七一）二〇五〇

kosei 生かされ、生きるチカラ。
立正佼成会
会長 庭野日鑛
理事長 國富敬二
〒166-8537
東京都杉並区和田二―一一―一
電話〇三（五三四一）一六一五
https://www.kosei-kai.or.jp

大日如来様御奉戴の
宗教法人大法輪台意
光妙教会
大日如来様御聖業奉讃会

天恩教
教主 鉢呂神龍
理事長 鉢呂金太郎
〒619-1301
京都府相楽郡笠置町大字有市小字西狭間一番地
電話（〇七四三）九五―二七八六

宗教法人
天心教本庁
教主 天元
羽曳野市古市一―六―八
電話 〇七二九―五六―〇八五五番

宗教法人
法公会
会長 榊原光徳
総本山 〒472-0023
愛知県知立市西町亀池二十四
電話 〇五六六（八一）三七五九

宗教法人
三輪神道宏充教本部
管長 吉川允恵
大阪市生野区新今里三丁目二番二十号
電話 〇六（六七五一）二七〇九番

宗教法人
良辨教本部教会
〒五八一―〇八一三
大阪府八尾市泉町一丁目一三七の三
電話（〇七二）九九六―四九一六番

新型コロナ禍―工夫を凝らし
各総支部が会合や学習会を開催

新宗連総支部協議会

新宗連が全国11地域に組織する各総支部は、10月8日にオンラインで開催した第31期第2回理事会で承認された各種方針を受けて、総務会等の会合を開催。同理事会で決定した令和3年度事業大綱、結成70周年記念事業大綱、新型コロナウイルス感染防止対策に伴う運営方法の変更等について情報の共有を図り、来年度の活動などについて検討を行った。

また、教団内人事異動等に伴う総支部役職者の交代等についても確認し、4月に書面評決による総務会で会長に就任した首都圏総支部・本山一博会長と四国総支部・小坂匡弥会長はオンライン会議の席上であらためて就任あいさつを述べた。

各総支部とも新型コロナウイルスの感染状況や役職者のオンライン環境等に配慮し、工夫を凝らして会合を開き、理事会での決定事項伝達のほか、近況報告、学習会の開催、情報交換等を行った。各総支部の会議開催日時、開催方法等は以下の通り(時系列)。

東北総支部(保積志胤会長)―10月29日・総務会(オンライン)

中国総支部(溝尻歌旱会長)―11月5日・総務会(オンライン)

四国総支部(小坂匡弥会長)―11月5日・総務会(オンライン)

九州総支部(力久道臣会長)―11月5日・総務会(オンライン)

奥羽総支部(田澤清喜会長)―11月6日・三役(正副会長、事務局長)会議(オンライン)

首都圏総支部(本山一博会長)―11月6日・総会、学習会(オンライン)

北関東総支部(新井光興会長)―11月9日・総務会、学習会(オンライン)

中部総支部(佐々木堯章会長)―11月12日・事務局長連絡会議(オンライン)

近畿総支部(藤井庸佐会長)―11月20日・総会、学習会(オンライン)

北海道総支部―書面による伝達(メール、郵便等)

北陸総支部―書面による伝達(メール、郵便等)

本山一博氏

小坂匡弥氏

脱プラに向け努力を
首都圏総支部 学習会

首都圏総支部(本山一博会長)は11月6日午後3時から、オンラインで学習会を開催した。東北大学名誉教授の齋藤忠夫氏を講師に「プラスチックにおける現状と課題」のテーマのもと、環境問題についての学びを深めた。

齋藤氏は講演で、ペットボトルの原料であるポリエチレンテレフタレート(PET)は、トレーや繊維などにリサイクルされることもあるが、その後はリサイクルできないので、再度ボトルにリサイクルすること(水平リサイクル)が望ましいと指摘。現在は五分の一から四分の一ほどしか水平リサイクルされていないため、この割合を増やすことが課題であると示した。

また海洋に捨てられたプラスチックを海鳥や海獣などが口にして死に至るケースや、マイクロプラスチック(MP、5ミリメートル以下のプラスチック)を人間一人あたり年間数万個摂取していると説明。MPによる健康被害は証明されてはいないが極力摂取を避けるべきだとし、ペットボトル飲料にもMPが含まれていることから「ペットボトルに入った水をやめて水道水を飲む、という生活スタイルに変えればMPの摂取量は確実に減らせる」と助言。またナイロンやポリエステルなどでできた衣服の繊維は洗濯の度にMPを流出させ、海洋生物などに入り込む可能性があることから、洗濯回数を減らすなど、衣類の使用についても考える必要があると示した。

さらに新型コロナウイルスの流行によりマスクの利用が増えたが、家庭用マスクである不織布マスクのほとんどがプラスチックでできており、今後これらのゴミが海洋汚染を悪化させる危険性があると示唆した。

そして、プラスチックの海洋汚染などを防ぐために

齋藤忠夫氏

も脱プラスチックを進める必要性を指摘。プラスチックのレジ袋有料化については、レジ袋がプラスチックごみの全体の2%に過ぎないため、効果は薄い可能性があるとしながら「多くの人がエコバックを使用するようになり、意識の変化が期待できる」と評価した。

具体的な行動として、オフィスや会議における一回しか使用しないもののプラスチック利用を控える、プラスチックでなくてもいいものはプラスチックを使用しないなどの一人ひとりの努力が必要だと訴えた。

新型コロナと新宗教
近畿総支部 学習会

近畿総支部(藤井庸佐会長)は11月20日午後2時から、オンラインで学習会を開催した。天理大学おやさと研究所教授の金子昭氏を講師に「新型コロナウイルス時代の新宗教教団のあり方」のテーマのもと、コロナ禍において新宗教教団がどのように対応していくかについての学びを深めた。

金子氏は、自身が会員である天理教の対応を例に、現状を説明。そしてコロナ禍における「新しい生活様式」は新宗教教団においても必須で、今までと同様に一度に多くの参拝者を迎えたり、直接面談するなどの対応ができないと指摘。また、社会的責任を果たすためにも、感染拡大防止に最大限の配慮が必要として「戦略的撤退も大切なこと」と表現した。

一方で、天理教を事例に「教団の復活力(レジリエンス)を信じている」と述べた。現在は新型コロナウイルス感染拡大防止のために、さまざまな不便を強いられ、活動が制限されてしまうが、教団草創期の頃も同様に通信や交通などの面で今より圧倒的に不便だったにも関わらず、教団は多くの人々の手を取り、導いてきたという。「教団の原点に立ち返る良い機会ととらえることが重要だ」と発想の転換の必要性を訴えた。

他方で、過去の成功体験に固執することなく、反省や変化していくことの大切さも指摘。「教団行事イコール信仰活動としてこなかったかと」と問題提起し、信仰生活を、教団生活から日常生活に切り替えることを提案。また、「オンラインの充実化は不可欠」と述べ、その可能性と限界を理解しつつ、SNSなど使えるものは何でも活用すること、ホームページでの積極的情報発信と内容の充実化などを訴えた。

講演する金子氏

青年部活動の課題 語り合う
第9回青少年育成セミナー

新宗連青年会

新日本宗教青年会連盟(新宗連青年会、宮本泰克委員長)は11月8日午前9時から、オンラインで「第9回青少年育成セミナー」を開催した。

宮本泰克委員長が開会あいさつで趣旨を説明し、橋本浩志事務局長が、事前に青年会役職者に依頼した「新型コロナ禍における宗教教団の青年部活動についてのアンケート」の結果を報告した。同アンケートでは新型コロナ禍で、困ったことや工夫したこと、信仰をもっていて良かったこと、よく利用したツール、課題などを尋ねた。

回答結果では、コミュニケーション、関係性維持の困難が挙げられる一方、LINE、ZOOMなど通信手段の活用が進んだことがわかった。

また信仰をもっていて良かったこととして、悲観的になり過ぎず、ポジティブに捉えようとできたこと、心の支えとなる超越的な存在(神仏)があること、同信の仲間とのつながり、祈ることができることを挙げる回答が多かった。課題としては、逆境で信仰に励む人と離れる人が二極化することを指摘した回答などがあった。

アンケート結果を踏まえ、小グループに分かれ、意見・情報交換を行い、最後に全体共有。この中で、各教団・個人の具体的な取り組みや思いが語られ、オンライン化について、遠方でも参加しやすいなどの利点の一方、心や信仰の問題を非対面で扱うことの困難や抵抗感、これまで諸行事に取り組むことを宗教活動と錯覚していたのではないかという気付きなど、多様な話題が話し合われた。

開会あいさつでセミナーの趣旨を説明する宮本委員長

第5回委員会を開催 令和3年度事業を審議

前日7日午後2時から、オンラインで令和2年度第5回(拡大)委員会を開催。地方連盟の役職者が各連盟の活動状況を報告した後、令和3年度事業について審議を行った。

ユースフォーラムについて、令和2年度は延期されたが、令和3年度は新型コロナ感染状況によって、小規模の集まりとオンラインでの参加を組み合わせるか、完全にオンラインで開催するかを決定することとした。第56回「戦争犠牲者慰霊並びに平和祈願式典(8・14式典)」は、次回委員会で、基本方針とプログラム案を審議し、開催規模(参列者の範囲、来賓招待の有無など)については、4月に判断することとした。以上を含む来年度事業方針・計画案並びに予算編成案を審議し、これを承認した。

この後、青年会結成60周年記念事業について意見交換。また本年度事業の「第10回沖縄慰霊平和使節団」について、新型コロナ感染状況を受け、青年会委員のみを対象とし、中止もあり得ること、1月31日にオンラインで事前学習会を開催し、使節団派遣・参加にかかわらず、広く聴講を呼びかけることを申し合わせた。

【諸会議 報告】

記念事業行事の開催はコロナ感染状況を注視
70周年特別委

新宗連結成70周年特別委員会(江口陽一委員長)は10月28日、11月27日のいずれも午後2時から、オンラインで第3回、第4回の委員会を開催した。

第3回委員会では、10月8日に開催した理事会で指摘を受けた70周年記念事業大綱の「目的」の記述について協議。伝わりやすい文言に修正し、採択した。また、記念事業の自然災害犠牲者及び戦争犠牲者の慰霊行事についても協議。日程や巡礼地での慰霊式典開催については、継続協議とすることを申し合わせた。

第4回委員会では、新型コロナウイルス感染拡大が急速に進んでいることに鑑み、巡礼地での式典開催が可能かどうか、また、その判断基準をどうするかなどについて協議。現時点において、感染防止の観点から最少人数で実施することを前提に準備を進めることとした。ただし感染状況を注視し、実施の可否については次回以降、協議することを申し合わせた。

教団人セミナーと来年度全国総会・学習会を計画
企画委

新宗連企画委員会(企画委、田澤清喜委員長)は10月30日午後2時から、オンラインで第31期第2回委員会を開催した。

報告事項の後、新型コロナウイルスに関する学習会について検討を行い、これまで開催してきた「教団人セミナー」の一環として開催すること、また講師候補が二人いることから、11月30日、12月16日の二回にわたって開催することなどを決定し、詳細について検討を行った。

続いて、令和3年度事業計画について協議を行い、例年通り定例の委員会を開催するほか、教化活動懇談会の推進、教団人セミナー及び全国総会・学習会の開催を計画することを申し合わせた。実施の在り方や有無については、新型コロナウイルスの状況を見ながら柔軟に対応することとした。

政治・憲法問題に連携して対応、結成70周年も踏まえ
政治委・憲法研

新宗連政治委員会(政治委、力久道臣委員長)と憲法研究会(憲法研、澤田晃成座長)は11月10日午前10時半から、オンラインで第31期第2回政治委員会と第53回憲法研究会の合同会議を開催した。

報告事項の後、令和3年度事業計画について協議を行い、新宗連結成70周年記念事業を踏まえた文言を他の委員会・機関とも共通して入れることを1月の事業計画策定会議で提案すること、今後も政治委と憲法研が連携して、政治をめぐる状況や憲法改正の動向を注視し、対応を図ること、周年に合わせた活動を検討することなどを申し合わせた。

他宗教との交流、本山前委員長を招き学習会を計画
信教委

新宗連信教の自由委員会(信教委、鈴木裕治委員長)は11月16日午前10時から、オンラインで第31期第2回委員会を開催した。

報告事項では11月11日に信教委有志で靖国神社を訪問し、山口建史宮司と懇談を行ったことを報告した他、信教の自由をめぐる現状についての報告が続いた。協議事項に移り、令和3年度事業計画を協議し、定例の委員会に加え、学習会の開催、他宗教(主に靖国神社)との交流を計画することとした。

また、結成70周年を見据えた来年度の活動に向け、次回委員会において本山一博元委員長を招き、新宗連における「信教の自由」概念の強調点の変化などについての学習会を開催することとした。

各教団の新型コロナ対応について情報交換
宗法研

新宗連宗教法人研究会(宗法研、仙波達治座長)は11月16日午後2時から、オンラインで第31期第2回幹事会を開催した。

各加盟教団の新型コロナ禍における近況について、情報交換を行った後、10月の理事会で承認された令和3年度事業大綱と結成70周年記念事業大綱について、事務局が報告した。

続いて、宗法研の令和3年度事業計画について協議を行い、原案通り承認。1月の事業計画策定会議に上程することを申し合わせた。

令和3年度予算編成方針について協議
会計委

新宗連会計委員会(会計委、中村史郎委員長)は11月26日午後1時半から、オンラインで第31期第1回会計委員会を開催した。

新任の会計委員と監事の自己紹介の後、理事会で決議された「令和3年度事業大綱」「令和3年度事業計画の策定にあたっての補足事項」に基づき、予算編成方針について協議した。

【訂正】前号1126号2面の御木優氏の訃報で「午後18分」は「午後4時18分」の誤りにつき、訂正しお詫びいたします。

御木貴日止師が逝去
惜別と感謝の心表し 最後の別れ

新宗連元副理事長 PL第三代教祖

12月8日告別式

新宗連元副理事長でパーフェクトリバティー教団(PL)教主の御木貴日止師が12月5日未明に逝去した。享年63歳。諡(おくりな)は「天聖海貴日止孚命(あまたかみたかとしとめのみこと)」。

御木貴日止師は1983(昭和58)年にPLの第三代教祖を継承し、教主に就任。新宗連では同年10月から常任理事に就任し、89(平成元)年から2012(同24)年3月まで副理事長を務め、新宗連発展に大きく寄与した。

告別式は8日午前11時から、大阪府富田林市の聖地、大本庁の正殿で執り行われた。国内の教師、教師夫人、教団教職者らが参列、海外の教師、教師夫人、教団教職者らはリモートで参列した。

正殿の聖壇に遺影を拝して、式典挙行が告げられ、須田正幸祭司長と板垣真光副祭司長をはじめとする24人の祭司で進められた。聖号奉唱、PL遂断詞に続いて「祭司長祭文並びに遂断聖花献上」となり、須田祭司長が聖壇に進み祭文を奏上した。

祭文では、御木教主のPL学園中学校時代からの経歴に触れつつ、教団内での足跡をたどった。1979(昭和54)年に摂事祖、翌年に青年部総裁に就任。81(同56)年に第三代教祖継承位に就き、翌年に教務総長に就任した。

第二代教祖(御木徳近師)帰幽に伴い、83(同58)年、第三代教祖に就任してからは精力的に全国の布教拠点を巡り、北米から南米、欧州、豪州などにも教えの光を届けた。

そして突然の帰幽に、須田祭司長は「ああ、無念なるかな、日知の御命や63歳を一期として天海に還り給う」と声を震わせ、参列者の悲しみも極まった。最後に、今後は教神として教団の行く末を見守っていただきたい旨を奏して、告別の辞を締めくくった。

喪主の美智代夫人(祐祖・教務総長)がゆっくりと聖壇に進み、深い祈りを込めて聖花を献上。続いて家族が順に聖花を献上し遂断った。この後、葬儀委員長の中田信和理事長が遂断り、参列者一同も合わせてその場で遂断った。

式典後、家族による花入れが行われ、最後の別れをして閉められた棺は、聖壇から石畳に停められた霊柩車までゆっくりと運ばれ、教団旗を掛けて車内に安置された。

参列者は正殿前広場から聖地の正面入り口に向かう通り道に整列し、惜別と感謝の心で何度も頭を下げ、手を振り見送った。

告別式は教団の密葬として執り行われ、新型コロナ禍で参列者の制限も図られたため、新宗連関係者の参列は叶わなかったが、岡田光央理事長はじめ多くの加盟教団代表から御木教主の急逝を悼む弔電が寄せられた。

聖地の正殿で執り行われた告別式

浄土会創立者 法輪氏が受賞、功績を称える
第37回庭野平和賞贈呈式

庭野平和財団(庭野浩士理事長)は10月26日午後2時から、オンラインで「第37回庭野平和賞贈呈式」を開催した。今回の受賞者は、韓国の在家仏教教団浄土会の創立者である法輪(ポプリン)氏。

「平和の祈り」の後、庭野浩士理事長があいさつ。例年春に国際文化会館で贈呈式を開催してきたが、新型コロナウイルス感染拡大により、時期を大幅に変更し、オンライン形式になったことを説明した。

続いて、庭野平和賞委員会のスーザン・ヘイワード委員長が贈呈理由を報告。法輪氏は35歳の時に仏教による社会問題解決を目指し浄土会を創立。朝鮮半島と海外の双方において平和のための活動を行ってきた。同氏が設立した「グッドフレンズ」という組織では北朝鮮の飢餓や自然災害に対応した人道支援を行い、「南北統一」のための識見も提供している。

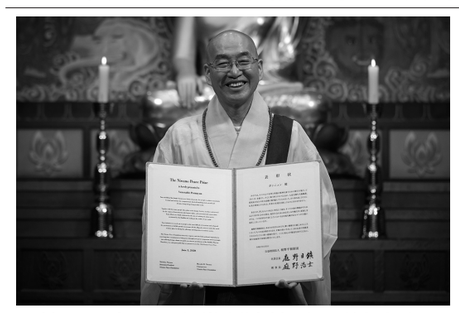
また、同氏が運営する「ジョイン・トゥゲザー・ソサイエティ(JTS)」という国際援助団体は、最近ではバングラデシュで、ミャンマーから逃れてきたロヒンギャ難民を支援している。法輪氏は「エコブッダ」運動も展開し、環境破壊に対する啓発と、環境に良いライフスタイルへの見直しなどを奨励している。

ヘイワード委員長はこれらの活動を、「生きとし生けるものすべてが相互に依存しあっているという認識に立った方法で提供されている」とした上で、「これらの取り組みを通して、諸宗教協力と平和という大義に多大な貢献をもたらしてきた」と説明した。

続いて、庭野平和財団の庭野日鑛名誉会長(立正佼成会会長)から賞状と顕彰メダル、賞金が贈呈された。庭野名誉会長はあいさつで法輪氏の気付きや学びを即座に実行する行動力が素晴らしいと讃えた。

受賞記念講演で法輪氏は、受賞について関係者らに謝辞を述べた後、世界的に流行している新型コロナウイルスについて、「世界中の人々が手を取り合わなければならないのに、他国を非難したり責任転嫁している」と指摘。

「本当に危険なのは、新型コロナウイルスではなく、この危機に直面し、分裂された私たちではないか」と現状を憂いた。しかし、人類は過去の危機を乗り越えてきたとして「苦境にあっても希望を持ち、お互いを信じる心で協力することで、私たちはどのような困難も乗り越えることができるのではないか」と訴えた。


第37回庭野平和賞が法輪氏に贈られた
©The Peace Foundation

水平社創立者 西光万吉 没後50年
第67回大宗連研究集会

同和問題にとりくむ大阪宗教者連絡会議(大宗連、北浦徳次議長)は12月4日、「第67回大宗連研究集会」を和歌山県和歌山市と紀の川市で開催した。今年は、部落解放団体「全国水平社」を創立し、団体旗『荊冠旗』をデザインし、水平社宣言を起草した西光万吉の没後50年にあたることから企画された。

和歌山市立岩橋(いわせ)文化会館に到着した一行は、部落解放同盟和歌山県連合会の福島隆志常任執行委員から岩橋地区の歴史について講義を受け、フィールドワークで文化会館周辺の湿地帯と急傾斜地部分の視察、再び会館で岩橋地区の運動について説明を受けた。

昼食後、紀の川市にある井坂文化会館で、西光万吉を顕彰するビデオ『はばたく紀の国』を視聴し、西光永住の地に移動。「不戦和栄の碑」の前で一般財団法人西光万吉顕彰会の飯田敬文代表理事から、西光の経歴や思想、活動の解説を受けた(写真)。この後、西光の住居を訪れ、西光が描いた日本画や蔵書、著作を見学し、学びを深めた。

六十一周年大祭に併せ―
第二神殿竣工特別大祭を執行
「愛眞一路の実践行」に邁進　崇教眞光

崇教眞光（岡田光央三代教え主）は11月1、3、4、6、7、8日の6日間にわたり、岐阜県高山市の世界総本山・元主晃大神宮の第二神殿で「六十一周年大祭並びに第二神殿竣工特別大祭」を盛大に執り行った。第二神殿は7年にわたり建築が進められ、10月14日に竣工式が挙行された。今回の特別大祭は、新型コロナウイルス感染予防のため、日本国内在住者のみの代表参拝とした。

6日間とも早朝から到着した参拝者は、真っ白な第二神殿の外壁に沿って歩き、エントランスを経て、大拝殿内に入場。1、2階の参拝席に着き、記念パンフレットを読み、様々な配慮が施された施設内を眺めながら開式を待った。

岡田教え主が登壇し、「御教示」

午前10時、場内の照明が落とされ天井の大スクリーンに夜空と満天の星が映し出された。次に赤々と光る玉が旋回して神殿に向かい、神殿屋根の棟玉が赤く輝き、明るさを増し、天井スクリーンは青空と虹になり、新宮が金色に照らされた。

この後、大祭式典が開始。岡田光央教え主が厳かに御親拝、真祈りを捧げ、大祭初日には御祭文を奏上した。この後、参拝者一同で「天津祈言」「伊都能売様祈言」「神歌」を奏上し、組み手（信者）代表が「感謝御礼言上」を発表し、式典を終了した。

休憩の後、来賓紹介・祝辞・祝電披露が行われ、大祭二日目には、道場昇格の御宣示と御神紋旗親授式が行われた。

岡田教え主が登壇し、「御教示」。第二神殿建立は、主の大御神様と岡田光玉初代教え主（救い主様）、岡田恵珠二代教え主（聖珠様）の「格別なる御守護御加勢の賜物」と感謝の真を捧げた。

第二神殿は、月々のみ祭りを行う聖場であり、地域の文化活動での使用、災害緊急時には建物の一部を避難所とする予定であることなどを述べた後、第二神殿を「愛和館」と命名し、「宗教宗派、信条を超えて集う場としたい」と発表すると、大きな拍手が沸き起こった。

第二神殿「愛和館」は、太陽光や木質バイオマスの発電、水素発生装置や燃料電池発電などを導入し、脱炭素社会における二酸化炭素削減を目指す、日本初の「新エネルギー施設」として始動するという。

また岡田教え主は、特別大祭から第二神殿「愛和館」にて大神業が開始されるとして、真光の「真」の表記を本来の「眞」に統一すること、愛和の「愛」と眞光の「眞」から「愛眞一路の実践行」に邁進することなども発表した。

大祭のフィナーレは岡田教え主と来賓、参拝者による万歳三唱が行われ、場内に大神業成就への決意の意気がみなぎった。

力久教祖へ一万巻の「写経」献上
すべての人々の幸せ願い　御神尊感謝大祭　善隣教

力久教主が場内を一巡し五色の幣で洗霊

善隣教（力久道臣教主）は10月20日から25日にかけて、福岡県筑紫野市の本庁聖堂で「御神尊感謝大祭」を執り行い、力久辰斎教祖（御神尊様）へ一万巻の写経を献上し、すべての人々の幸せを願う祈りを捧げた。

初日20日は、各教会の教会長・三役によって、1月から信徒が当日の大祭に向け行じていた写経行による一万巻の「写経」が献上された。力久道臣教主は信徒の並々ならぬ精進に感極まり涙ながらに祭文を奏上し、その声を聞き信徒も感涙した。

「御神像御開顕（みすがた）」では、参列者が感動と歓喜の中「やります」と連呼し、御神尊像を拝した。続いて力久教主が場内を一巡し五色の幣で洗霊、御慈光を照射した。

この後、武廣茂樹理事長が「写経一万巻達成おめでとう！」と祝し、教主からも感謝の言葉が述べられた。写経は御霊殿の「御遺顕の間」に献納され、信徒は天水を合掌し拝観した。

密集を避けるため、21日から24日までは8教区の分散参拝が行われ、最終日25日は全国から信徒が集い、祭典が執り行われた。

最初に、聚善の行による「写経」と、幽顕行で祈りを込めた「祈願札」を御霊殿へ献上。その後、聖堂にて「大祭御神火」が点火されると、力久教主が祭文を奏上。教主の呼びかけによる「御神像御開顕」で御神尊様の御慈光を存分に浴びると、信徒の感動と感謝の「やります」が響いた。

祭典が終了すると、武廣理事長が写経一万巻献上を喜ぶあいさつを述べた。力久教主は「御親教」で、「一万巻の写経を御神尊様に献上することができ、心からありがたく思います。これからも感謝の心を忘れず、すべての人の幸せを祈ってまいりましょう」と呼びかけた。

午後は、御霊殿神殿前にしつらえた祭場で、「世界平和祈願並びに生命浄化火焔熱祷の御祈り」が行われた。全信徒が精進して献上した「世界平和祈願札」と「生命浄化願い木札」のお焚き上げを行い、力久教主の大音声で投げ入れられた4枚の「大祈願札」が焚き上げられ、『大御聖経』をもって洗霊入魂。雲一つなく晴れた秋空の中、祈りの言霊が響き渡った。

霊性の浄化、魂の覚醒をはかる
解脱金剛72年祭　解脱会

解脱会（本部＝東京・四谷、岡野英祥法主）は11月4日正午から、京都市東山区の真言宗泉涌寺派総本山の御寺泉涌寺で「解脱金剛（岡野聖憲会祖）72年祭」を営んだ。

舎利殿御宝前にて岡野英夫理事長が敬白文を奏上し、大導師の上村貞郎泉涌寺長老と式衆が入殿し開式。僧侶による読経の中、岡野理事長と渡辺孝彦顧問が焼香した。

斎祀精霊法要に移り、読経の間、上村長老が今年、解脱金剛宝塔に奉斎される22霊の氏名を一霊一霊読み上げた。岡野理事長らや斎祀精霊遺族が焼香した後、解脱会の勤行を行った。今回は、昨年4月3日に逝去した岡野聖法長老（新宗連元理事長）が斎祀された。

岡野理事長があいさつ。御寺泉涌寺の尊さを広く伝える必要があるとした上で、霊性を浄化し、魂の覚醒をはかることで、現在の困窮を打破することを述べ、「解脱金剛宝塔に鎮まります御精霊と共に、我々は自らの手ですべての命を調和する新しい時代、世界を切り開くことをお誓いしましょう」と呼びかけた。

献納之儀では、岡野理事長から上村長老に護持奉献金などの目録が手渡された。上村長老は謝辞とともに、「一日も早く新型コロナが終息し、皆さんと元気にお会いできる日を楽しみに待っています」と語った。

会祖を祀る解脱金剛宝塔前であいさつ

会祖を祀る解脱金剛宝塔に場所を移し、奉斎之儀を厳修。宝塔前に岡野理事長と役員、斎祀精霊遺族らが参集し、岡野理事長による敬白文の奏上、焼香などの後、勤行を行った。最後に岡野理事長があいさつを行った。

岡野理事長が解脱金剛宝塔前であいさつ

大恩師の指導　今一度受け止め
秋の大法要を厳修　妙智會教団

宮本法嗣が「ご指導」で修行の在り方説く

妙智會教団（本部＝東京・代々木、宮本惠司法嗣）は11月14日午前10時から、千葉県九十九里町の千葉聖地で「秋の大法要」を厳修した。

当日は新型コロナウイルス感染防止対策のため、参拝人数を大幅に制限した上で、検温・消毒・室内換気・マスク着用を徹底し、さらに座席の間隔を十分に空けるなどの配慮が取られた。

式典に先立ち、この日の早朝、宮本惠司法嗣が久遠佛塔内に2万9055家の総戒名を新たに祀り込みした。

式典は、大道場の須弥壇正面に、宮本孝平大恩師と宮本ミツ会主、宮本丈靖大導師、宮本愛子女先生の四師の「ご法號」が安置された中、開式した。

宮本法嗣による唱し、祈願文を奏上。続いて参列者一同で「観世音菩薩普門品第二十五」を読誦した。

この後、宮本法嗣による任命式が行われ、新支部長と新役員の任命、そして支部旗・法章が授与された。

続いて、宮本法嗣が「ご指導」を行い、はじめに規模を縮小しての法要となったことを説明し、コロナ禍の中での参列者に感謝を述べた。

そして11月14日は元々、大恩師の祥月命日にあたる法要であるが、2017（平成29）年から「秋の大法要」として厳修している。ことに触れ、「法要の名称は代わっても、大恩師さまの大きなお慈悲のお心は変わりません。忍善の道を歩めというご指導をもう一度、しっかりと受け止めてください」と呼びかけた。

さらに大恩師、会主、大導師の三師の「ご法號」には共通して「光」という文字が付けられていることについて説明。大恩師は声や姿、顔、振る舞いが光り輝いていたこと、会主は「光」には「光明を照らす」という意味があり開教当初からよく使用し、会主の笑顔は教団の中でも家庭でも光り輝いていたこと、そして大導師はその姿を見せると場が明るくなっていたことなどを述懐し、「光は、妙智會の教えにとっても深い意味があり、コロナ過で暗いことばかりの今日では、とても意味深く感じられます」と三師の人柄を強調し、コロナ禍における修行の在り方を説いた。

笑顔の力は繁栄、平和を導く
開祖御生誕百十二年祭　大和教団

大和教団（保積秀胤教主）は12月6日午前10時から、宮城県仙台市の大國神社祈祷殿で「開祖御生誕百十二年祭」を執り行った。

祈祷殿の神前に保積史子開祖の御尊影を拝し、斎主の保積秀胤教主が、開祖の生涯への想いが込められた、感謝の誠の祝詞を厳かに奏上した。

続いて保積初江教母をはじめ、来賓、総裁家など代表者による玉串が捧げられ、儀式を終了した。

この後、記念式典が催され、来賓代表の祝辞、祝電披露の後、保積教主が「開祖様のご生涯」と題して講演を行った。

保積教主は冒頭、開祖御生誕祭では「開祖をもっと知り、生き様を学ぶ日にしましょう」との祝詞を唱えたことや、世界平和万人幸福、他人のために祈ってから自分の祈りを捧げる平和串の神徳などを説いた。

そして2003（平成15）年、満面の笑みで信者を救っていた開祖の臨終に立ち会い、死後に開祖の表情が日に日に瑞々しい少女のように変わっていった様子を話し、「生きている時は笑顔で過ごしなさい。死ぬ時は若やいで神様の元に行くのだね。そういう信仰をしますと顧み、開祖が示したことが本当にわかった気がします」と顧み、開祖が示した、心から感謝することの教えとは何かを説き、「万物一切を救う力は大和の感謝」「私ら信仰者は毎日の命に感謝する。衣食住のすべてに感謝です」と力説した。

保積教主が開祖への感謝の祝詞を奏上

そして開祖が残した教え「笑顔の力は喜びの力である。喜びの力は幸せの力である。幸せの力は繁栄の力である。繁栄の力は平和の力である。笑顔の力は平和を導く力である」などを読み上げ、あらためて「皆さん、笑顔を作ってください」と呼びかけた。

戦没者に祈り捧ぐ
万国忠霊塔慰霊祭　七曜会

七曜会（本部＝東京都渋谷区、眞塩陽一郎教主）は11月3日午前11時から、神奈川県伊勢原市の大山阿夫利神社境内の万国忠霊塔で「第62回万国忠霊塔慰霊祭」を斎行した。

万国忠霊塔は溝上恵照初代教主が1958（昭和33）年に世界のすべての国、あらゆる時代の戦没者を慰霊するために建立された。毎月の慰霊供養と毎年11月3日に建立慰霊大祭を斎行している。

当日は幻想的な雰囲気の中、大山阿夫利神社神職による献饌、祝詞奏上の後、眞塩陽一郎教主をはじめ参列者により玉串奉奠が厳かに行われ、御霊にまごころからの祈りを捧げた（写真）。

各地で秋の大祭

止める勇気も「積極」
秋季大祭　救世真教

救世真教（新井光興会長）は11月3日午前10時から、群馬県高崎市の本部聖地で「秋季大祭」を執り行った。

今回は新型コロナ感染拡大防止のため、マスク着用、座席の間隔を空け、人数制限をするなどの対策を施した上で実施し、参列できない信者には動画配信を行った。

大祭は、神前に信者が収穫したばかりの品々を奉納し、みろく太鼓により開幕。「誓い」「信条」を唱和の後、新井光興会長が斎主になり「秋季大祭祝詞」と「収穫感謝祭祝詞」を奏上。斎主と参拝者代表が玉串奉奠を行った。

新井会長が「秋季大祭祝詞」を奏上

続いて「新型コロナウイルス早期終息祈願祝詞」を奏上、「秋季大祭御歌」を奉唱し、「教主様に感謝の礼拝」を執り行った。

「真鏡拝読」の後、本田満明理事が登壇し、小野田松造教主から「真実を見る眼と創造性を失わぬよう」との御教えを頂き、信仰の道を志したと自身を振り返った。

続いて新井会長が登壇し、「秋季大祭御歌」について解説。「信条の第1条が『積極は善』である事に教主様の思いが感じられると共に、前に進むことだけが積極ではなく、時には止める勇気も積極になる」と説いた。

思いやり忘れずに
秋季例大祭・感謝祭・災害復興祈願祭　大和教

大和教（保積敬子教祖）は11月8日午前11時から、宮城県塩竈市の大和教本廳で「秋季例大祭・感謝祭・災害復興祈願祭」を斎行した。

参列者は新型コロナウイルス感染予防のため、間隔を空けて着座。斎主の保積敬子教祖と斎員が神殿に入殿し、「斎主一拝の礼」と修祓を行った。

この後、「秋季例大祭祝詞」を奏上、祭壇上では斎主を中心に護摩祈祷が斎行された。

斎主が祝詞を奏上した後、護摩壇に火が灯されると、斎主と斎員が祈願者の氏名などを読み上げて護摩木を炎の中に投げ入れ、心願成就を祈願した。

この後、本堂に移動して十三回忌法要を厳修。読経の中、参拝者が焼香した後、即眞住職が「法話」を行い、「偉大なる師匠に少しでも近づき、皆さまから愛され親しまれるように努めてまいります」と語り、「今日は皆さまとご一緒に法要できましたこと、心より御礼申し上げます」と感謝の意を表した。

斎主を中心に護摩祈祷

心願成就を祈願
秋季大祭・前住職十三回忌法要　医王山立宗

医王山立宗（井上順圓主管）は11月8日午前11時から、石川県金沢市の医王山寺で「令和二年秋季大祭」と前住職（主管）・即眞靄師の「十三回忌法要」を併せて執り行った。即眞師は比叡山延暦寺一山の薬樹院住職で大僧正、新宗連では評議員を務め、2008年（平成20）年11月29日、77歳で遷化した。

即眞住職が「法話」

秋季大祭は開基神廟前にて採燈護摩法要を厳修。比叡山一山薬樹院住職の即眞永周氏が導師を務め、医王山大権現祈願作法に則って執り行われた。参拝者が読経する中、導師が護摩壇に点火。参拝者は家内安全や身体健康など諸願を記した護摩木を炎の中に投げ入れ、心願成就を祈願した。

この後、本堂に移動して十三回忌法要を厳修。読経の中、参拝者が焼香した後、即眞住職が「法話」を行い、「偉大なる師匠に少しでも近づき、皆さまから愛され親しまれるように努めてまいります」と語り、「今日は皆さまとご一緒に法要できましたこと、心より御礼申し上げます」と感謝の意を表した。

結成70周年 新宗連
新宗連青年会 結成60周年
原点と歩みをたどる

2021(令和3)年、新日本宗教団体連合会(新宗連、岡田光央理事長)は結成70周年、また新日本宗教青年会連盟(新宗連青年会、宮本泰克委員長)は結成60周年の佳節の年を迎えた。両団体の結成並びに主活動の原点を振り返るとともに、長年にわたる歩みをたどってみたい。

「信教の自由」の堅持を理念に展開

新宗連は、日本が連合国軍による実質的な占領から脱する直前の1951(昭和26)年10月17日に結成。戦前・戦中には弾圧され、自由な宗教活動を行えなかった新宗教を中心に、24教団での発足となった(現在は59教団)。

設立後に発表した『新宗連要覧』には、先の大戦への反省と世界平和実現への決意、そして弾圧を受けた歴史から「信教の自由」の堅持が掲げられた。「どの一角から『信教の自由の保証』がくずれはじめても、対岸の火災視せず、自己の頭燃を払うが如くこれを処理せねばならない」と、そこでは述べられている。新宗連はこれら設立当初からの理念に基づき、活動してきた。

新宗教への偏見打破と平和実現に向けた活動

日本国憲法が1946(昭和21)年に制定されて以降、「信教の自由」は認められ、どのような宗教団体であれ自由な宗教活動が可能となった。しかし、新宗教は「新興宗教」と揶揄されており、自由な宗教活動を行うためには国民の偏見を打破する必要があった。

初代理事長・御木徳近師は、初代事務局長であった大石秀典師に「そのような風潮(新宗教に対する偏見や揶揄)に立ち向かって反論したり対立したりしないで、あくまでも謙虚に受けとめ、どんな場合にもどんな事に対しても誠心誠意をもって奉仕させていただくという、宗教者としての在り方に徹して行きましょう」と語り、新宗連は社会活動によりその偏見を打破すべく行動することとなる。

日宗連に加盟した1952年に開かれた理事会

1952(昭和27)年、新宗連は日本宗教連盟(日宗連)に加盟し、新宗教も「宗教」としての認知を得るとともに、社会に対しての発信も強めていく。54(同29)年に「原子力の武器利用とその実験に関する決議」を採択したことを皮切りに、原爆使用・保持に対する反対、軍縮を求めるなど、平和実現のための活動を展開してきた。

核兵器・軍縮を求める25,000人集会(1982年)

終戦60年に際し、広島市で平和行進(2005年)

現在でもその平和活動は続いており、近年では緊張高まる北朝鮮情勢を憂慮し、「すべてのいのちを尊び平和を祈る集い」(2017年11月23日)を開催し、絶対非戦、対話と協調を呼びかけ、平和を祈った。

すべてのいのちを尊び平和を祈る集い(2017年)

「信教の自由」を守り個々の宗教活動を促進

新宗連は宗教団体の自由な活動を守るため、宗教と政治との関係についても研究・提言を行ってきた。

靖国神社の国家護持が提案された1960~70年代にかけて、新宗連は特定宗教の国家護持により「信教の自由」が侵害される可能性を危惧し、反対活動を展開。署名活動や街頭行進を行い、靖国神社の「国民護持」を訴えた。

その後、新宗連内部に設置された「信教の自由委員会」は、歴代首相・閣僚による靖国神社公式参拝への反対声明を発表するなど、「信教の自由」侵害に対して目を光らせている。

さらに「政治委員会」「憲法研究会」を設置し、政治家に対して宗教の特性や「信教の自由」への理解を求め、憲法が改悪されないように研究や学習会を展開している。

他方で、新宗連は1979(昭和54)年に「宗教法人研究会」を設置し、宗教法人の実務や税務、宗教法人の役割などについて、個々の宗教団体の自由な活動に資するために研究を重ねている。さらに81(同56)年に「同和推進連絡協議会」を発足させ、部落差別問題をはじめ、様々な人権問題を研究し、啓発することで加盟教団の活動を支援している。

宗教法人の実務などを学ぶ宗教法人研究会の「拡大宗法研」(2019年)

また、結成50周年を契機に2001(平成13)年11月1日から「宗教もしもし相談室」を開設。相談室では各教団の布教ではなく「傾聴」により、宗教関連の問題で悩んでいる人の手助けをしているが、気軽に相談できる窓口を設けることで「怪しい」と敬遠されがちな宗教の信頼回復を図る目的も持っている(現在は新型コロナウイルス感染予防のため、休止中)。

二酸化炭素の削減、電力ダイエットを呼びかけるポスター

草の根で広がる宗教協力 環境保全とボランティア

結成当初、新宗連の地方組織は近畿と東京のみだったが、1958(昭和33)年から結成30周年の81(同56)年にかけ北から南に11の地方組織(総支部)が結成された。さらに草の根での活動は広がり、県や地区単位での協議会を結成し、現在では54協議会にまで拡大した。

香川県協議会による坂出市の沙弥島海岸の清掃奉仕(2017年)

結成40周年を機に地球環境保全活動への取り組みをはじめ、草の根での啓発と活動を展開。植樹、水質保全、ゴミの減量、清掃など、地域ごとに特色ある活動が行われた。その後、地球温暖化問題にも関わりを深め、二酸化炭素の削減などを進めるための「電力ダイエット運動」を2004(平成16)年から3回にわたり実践した。

また、協議会では都道府県の宗教連盟や宗教懇話会に参加し、新宗連加盟教団以外の教団とも、地元での宗教協力の輪を広げている。こうした日々の積み重ねが震災などの有事の際に効果を発揮し、ボランティア活動や宗教を超えた連携活動に生かされている。

結成70周年を迎える本年、新宗連は原点を振り返り、さらなる活動を展開する。

教えや信条の違いを越え「世界平和への道」に邁進

新宗連青年会は、新日本宗教青年会近畿連盟(青近連・1954年結成)と、新日本宗教青年会関東連盟(青関連・1957年結成)が相互に啓発し合い、結束を深め、1961(昭和36)年11月26日に結成した。

結成宣言では「われわれ信仰に生き、修養に励む青年は、自己の所属する教団を通じ、そしてまたそれらを超えて相互の正しい理解を深め、共通の立場を見出し、ともに手を携えて、真の自由と正義、平和の世界の実現に寄与すべく、ここに新日本宗教青年会連盟の結成を宣するものである」と高らかに謳っている。その後、地方連盟も組織され、現在では新宗連総支部の組織と歩調を合わせ、全国に11の地方連盟がある。

㊤第1回「8・14式典」

㊦第50回の同式典(2015年)

新宗連青年会は、教えや信条の違いを乗り越え、宗教協力の理念の基、共に学び、励まし合い、互いの信仰信念(教えを磨きつつ、「国民皆信仰の推進」「宗教協力の発展」、そして「世界平和への道」に邁進してきた。

「8・14式典」から始まった国内外の慰霊

新宗連青年会2大行事の一つである「戦争犠牲者慰霊並びに平和祈願式典(8・14式典)」はあらゆる戦争犠牲者の慰霊と平和を祈り1962(昭和37)年から開催。この「祈り」を行動の原点として、74(同49)年に、先の大戦を見つめ直す第1次「(東南)アジア青年平和使節団(懺悔行)」を派遣した。

1977年から継続する「ユースフォーラム」。写真は松山市でのフォーラム(2019年)

この使節団でタイ王国カンチャナブリ県サイヨーク・ノイ・ナムトクに戦争犠牲者への慰霊と供養の心を表すサンプラプーン(タイ式供養塔)を建立。今日まで中国や韓国、タイ、ミャンマー、中華民国(台湾)などアジア各地に平和使節団を派遣している。

また、国内では、2008(平成20)年から「8・14式典」の祈りとアジア青年平和使節団の原点を見つめ直す機会として沖縄慰霊平和使節団を実施している。

これら平和使節団は国境や人種、憎しみや恨みを超越し、それぞれが信ずる神仏の願いに基づき、全ての戦争犠牲者を慰霊し、自己中心的な視点を捨て、「絶対非戦」と「恒久平和実現」を祈念することを目的に派遣を継続している。

第22次平和使節団―タイ・ナムトクにサンプラプーンを新調した(2010年)

弁論大会から双方向の「ユースフォーラム」へ

二大行事のもう一つとして、互いの主張を競い合う弁論大会を発展的に解消し、1979(昭和54)年から「ユースフォーラム」を継続している。「出会い・啓発・学習」の場として、教団・教義の違う青年同士がテーマに基づいて語り合うことで、「参加する青年の信仰を深める」だけでなく、「信仰を持っていることへの尊さ」に気付き、お互いを高め合う場となっている。全国各地で開催し、環境問題や戦争と平和など、地域色豊かな様々なプログラムを展開している。

2005(平成17)年から「宗教的感性」の向上を目指して「屋久島スタディーツアー」を5回にわたって実施。11(同23)年11月26日に結成50周年を迎えた青年会は、大阪府富田林市のパーフェクトリバティー教団大本庁で「結成50周年記念式典」を挙行した。

同式典で『50周年宣言文』を発表し、「明るさ」「温かさ」「安心感」をもつ「真の平和を生みだす人」の育成を目的として、13(同25)年から屋久島スタディーツアーの後継として、多様なテーマで「青少年育成セミナー」を行っている。

『50周年宣言文』を発表した記念式典(2011年)

社会貢献活動としての災害復興ボランティア

新宗連青年会は社会に関わる活動も活発に展開しており、阪神・淡路大震災(1995年)、新潟県中越地震(2004年)、東日本大震災(2011年)に際してボランティアを派遣し、現地の復興・復旧や被災者に寄り添う行動や傾聴、慰霊祭などを実践。東日本大震災ではボランティア活動を行うとともに、発生から約6カ月後の2011(平成23)年9月13日から「東日本大震災犠牲者慰霊使節団」を派遣し、福島、宮城、岩手の3県で慰霊の誠を捧げた。

東日本大震災犠牲者に慰霊の誠を捧げ、復興を祈念する(2011年　宮城県菖蒲田海岸)

また、16(同28)年には、熊本地震被災地の復興支援として、新宗連青年会と世界宗教者平和会議(WCRP)日本委員会が「VOWS(バウズ)(Volunteers of WCRP & SYL for KUMAMOTO)」を結成し、熊本県南阿蘇郡西原村で約3カ月、計7次までボランティア派遣を展開。

その後も、18(同30)年の西日本豪雨の被災地である広島県三原市や愛媛県西予市野村町、19(令和元)年に発生した台風15号・19号・21号の被害を受けた千葉県館山市や安房郡鋸南町、福島県郡山市での災害復興支援をVOWSとして協働で行い、毎年のように発生する自然災害に対して教団の異なる多くの青年を派遣している。

西日本豪雨に際してのVOWSボランティア(2018年　広島県三原市)

本年は新宗連青年会結成60周年を迎え、改めて原点を振り返るとともに、新型コロナ禍で内向的な時代になっているが、内外に平和を訴え、平和活動の実践を進める。

新型コロナウイルス感染症　一日も早い終息を祈念いたします　(50音順)

宗教法人 霊波之光教会 総教司令本部

月読之命奉斎 榊の葉でみる神占 宗教法人 和光道教団本部 大阪市天王寺区上本町二丁目一の二十三 電話 大阪(六七六一)一四八〇番

公益財団法人 世界宗教者平和会議日本委員会 会長 庭野日鑛 理事長 植松誠 〒166-8531 東京都杉並区和田二丁目七番一号 普門メディアセンター二階 電話(〇三)三三八四-二三三七

公益財団法人 庭野平和財団 理事長 庭野浩士 160-0022 東京都新宿区新宿一丁目一六番九号 シャンヴィラカテリーナ5階 電話 〇三(三二二六)四三七一番 FAX 〇三(三二二六)一八三五番

公益財団法人 新宗連 〒151-0053 東京都渋谷区代々木5-57-10 電話 〇三-三四六八-五五五一

新日本宗教青年会連盟 青近連 青北関連 青関連 青九連 青北連 青道連 青四連 青中国連 青中連 青奥連 青東北連